

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

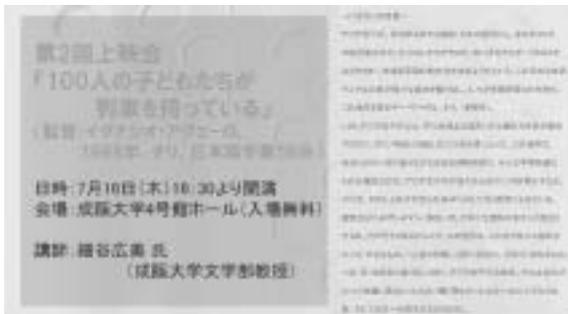
No.103 July, 2009

目次

2009年度CAPS主催・特別企画 連続映画上映会
 「アジア太平洋の世界 スクリーンの中の出会い」 1
 想定問答・連続映画上映会が目指すもの
 CAPS主任研究員 愛甲 雄一 2
 第1回上映会 報告『アルナの子どもたち』
 CAPS客員研究員 高一 3
シリーズ・若者たちのアジア太平洋世界
 M.I.X. が誕生するまで 文学部教授 竹内 敬子 4
 M.I.X. の紹介 文学研究科 M1年 南斉 真奈美、
 文学部3年 杉山 亜湖 5
CAPS主催 公開シンポジウム
 講演 Prof. Sanjay Kumar 6

Sanjay Kumar 教授 講演の紹介
 理工学部教授 小島 紀徳、特別共同研究員 黒澤 勝彦 ... 7
報告：2008年度学術研究員によるメンター研究会
 2008年度学術研究員 松元 一明 8
 2008年度学術研究員 真野 貴世子 9
シリーズ・本を読む
 伊藤達雄・戒能通厚編『アジアの経済発展と環境問題』
 (2009年4月1日 明石書店)
 法学部准教授 佐藤 義明 11
2009年度CAPS新メンバー紹介 12-13
センター活動報告、センター招聘外国人研究員 14

2009年度アジア太平洋研究センター(CAPS)主催・特別企画
連続映画上映会「アジア太平洋の世界 スクリーンの中の出会い」



成蹊大学アジア太平洋研究センター(CAPS)主催 連続映画上映会
**アジア太平洋の世界
 —スクリーンの中の出会い—**



お知らせ

アジア太平洋研究センター(CAPS)では現在2009年度の特別企画、連続映画上映会「アジア太平洋の世界 スクリーンの中の出会い」を開催しております。去る6月26日(金)には『アルナの子どもたち パレスチナ難民キャンプでの生と死』(2004年、イスラエル)、そして7月16日(木)には『100人の子どもたちが列車を待っている』(1988年、チリ)と、既に2本の映画を上映しました。今後も夏休み明けの10月以降に、ひと月にほぼ1回のペースで上映会を催していきます。各回では映画上映のほか、専門家による映画の舞台の歴史・背景についての解説もごさいます。どうか皆様、ふるってご参加ください!(各回とも入場は無料)

次回上映会の予告
『ザ・カップ 夢のアンテナ』
 (1999年、ブータン・オーストラリア)
 日時: 10月1日(木) 16:30より開演
 場所: 成蹊大学5号館102教室(予定)
 講師: 中上淳貴氏(東京大学大学院)

想定問答・連続映画上映会「アジア太平洋の世界 スクリーン中の出会い」が目指すもの

CAPS主任研究員 愛甲 雄一

Q.(学生)こんにちは。本日はアジア太平洋研究センター2009年度の目玉企画、連続映画上映会「アジア太平洋の世界 スクリーン中の出会い」について、愛甲主任研究員に同企画のねらいなどを伺っていきこうと思います。

A.(愛甲)よろしくお願ひします。

Q.まず何を切っ掛けにして、この企画を思いついたのですか？

A.色々理由はあるのですが、何よりも本学の学生諸君にセンターの存在を広く知ってもらいたかった、ということがありますね。ご存じのとおり、アジア太平洋研究センターは成蹊大学唯一の学際性を持った研究センターです。しかし直属の教員や学生がいないために、各学部などに比べるとその存在感は格段に薄い。これはある卒業生から聞いた話ですが、彼女は学部在学中の4年間、1度としてこのセンターの存在は知ることがなかったそうで・・・。

Q.そもそも一般の学生には、同センターが提供するイベント類は敷居が高すぎるのでは？



〔第1回上映会会場の様子〕

A.おそらくそうでしょうね。センターは30年近くに及ぶこれまでの歴史の中で、数々の研究会やシンポジウムなどを催してきました。海外からも多数の研究者をお招きするなど、その存在は国内外に少なからず認知されていると思います。しかしその種のイベントは概して専門性が高く、学生諸君や一般の方々にとってはなかなか近寄りづらい。いわゆる研究機関としてはそれでも構わないのですが、大学に付属する機関であるなら、やはりある種の「教育的貢献」も必要でしょう。今後アジア太平洋地域を専門とする若手研究者・専門家を育成していく、と

いう意味でも、これはセンターが果たすべき大切な役割のはずです。そこで所長の亀嶋先生を始め様々な関係者と話し合いを重ねた結果、今年度の連続企画として、アジア太平洋世界を舞台にした映画を年間を通じて上映していきこう、ということになったわけです。映像が媒体であれば専門家でなくとも参加がしやすく、その結果皆さんのような学生諸君の間でもセンターへの認知度が上がるだろう、と。

Q.確かに映画の上映会なら、私だって参加してみよう、という気になるかも。でもアジア太平洋を舞台とする映画は私が普段見ているハリウッド映画なんかと違って、なんだか難しそう。

A.ご心配なく。その映画が舞台としている社会や地域を専門としていらっしゃる方を毎回お招きして、歴史的背景や社会状況などを解説してもらうことにしています。それと合わせて映画を見るなら、中身の理解は一層深まることでしょう。

Q.親切ですね！

A.最近のアジア太平洋世界に関する報道はと云えば、中国での反日運動や北朝鮮のミサイル発射など、やたらとネガティブなものに偏っている。こうしたことが、あなたのような若い人たちの間にこの世界への関心をなかなかかき立てない理由があるように思われます。そこでセンターとしては、そうしたマイナス・イメージに収まりきらない、アジア太平洋世界が持っている豊饒さを映し出す映画に重点を置いて、今後上映を続けていきこうと思っています。これが多くの若い人たちにとって、アジア太平洋世界との「出会い」となってくれば幸いです。

Q.今後この企画に関しての予定や抱負は？

A.まず10月下旬か11月上旬に、映画数本を同時期に上映する「拡大上映会」を開催するつもりです。また本企画は一応今年度限りですが、可能な限り来年度以降も続けていきたい。やはり「継続は力なり」ですから。

Q.それには、私たち学生が多く参加することが必要ですね！

A.おっしゃる通り。そして皆さんの方からもセンターに対し、今後開催してほしい企画のアイデアなどをどんどん出してほしいと思います。アジア太平洋研究センターを、どうぞよろしくお願ひします！

「アジア太平洋の世界 スクリーンの中の出会い」第1回上映会 報告

『アルナの子どもたち パレスチナ難民キャンプでの生と死』

CAPS 客員研究員 高 一

6月26日、アジア太平洋研究センター主催による連続映画上映会が8号館201教室にて行われた。第1回目にも関わらず210名もの参加者があった。連続行事としては上々のスタートを切ったといえるだろう。映像が映し出されると、学生たちの集中度も格段に増すようであった。

今回の上映作品は『アルナの子どもたち - パレスチナ難民キャンプでの生と死』。上映に先立って、講師としてお招きした田浪亜央江さんから映画に関する背景説明があった。まずは本作品のタイトルにもなっているアルナさん、そしてアルナさんの息子であり監督でもあるジュリアノさんについて。ユダヤ人であるアルナは、いまはイスラエルといわれる国であるパレスチナに生まれ、パレスチナの土地でユダヤ人もパレスチナ人も共存できる社会を信じていたのだが、アルナがナイーブに考えていた共存するイスラエル社会は存在することはなかった。その後アルナは平和活動に身を投じることになり、自費を投じてパレスチナ難民キャンプに小劇場を作ったのである。

ジュリアノさんはユダヤとパレスチナの文化をバックグラウンドに持つ。アルナの夫はパレスチナ人だ。もともと舞台俳優であるジュリアノは、母が作った小劇場で子どもたちの演技指導を行っていた。その後、病に冒されていたアルナの亡き後、ジュリアノの足は遠のき、劇場も活動を停止してしまう。しかし2002年のイスラエル軍のジェニン侵攻後、ジュリアノは子どもたちの安否を尋ね、成長し青年となった「子どもたち」と再会する。映画は、再会してからの映像と、かつて演技指導していた頃に記録として残していた映像が柱となっている。しかしジュリアノ自身、まさかこのような映画が完成するとは思ひもしなかったとのこと。

上映後、会場からパレスチナの状況に対する一般のイスラエルの人の認識についての質問があった。質問の根底には、イスラエルの国民が自国の行動を正当なものだと捉えているのだろうかとの問いがあるようであった。しかしこれに対する講師

の反応は決して希望的なものとはならなかった(除隊後の兵士による証言が出始めたという変化を紹介することはできたのだが)。田浪さんによれば、イスラエルでは、イスラエルという小国を守るのは義務だという道徳的教育を受けていることもあって、一般の人たちは「おかしい」と思う契機をもてない。多くの人たちは占領地に関する情報に驚くほど疎く、社会が疑問を持っていないような構造になっているとのことであった。



〔講師の田浪亜央江氏〕

さて、筆者の感想も添えなければならぬのであろうが、それは田浪さんとアルナさんのコメントを紹介することに代えさせてほしい。田浪さんは、「なぜ自爆という形でのテロという手段をとるのか」、「ひどいのではないか」などの質問を受けることが多いという。これに対して、むしろ次のように問題を提起した。このような状況を支持するのかしないのかという問いかけは多いのだが、支持するかどうかという二者択一自体が成立しないのではないかと。自らが主体的に選択できる行為については「支持する／しない」という基準での判断ができる。しかしパレスチナではもはや自由な判断が伴わない戦い方・死に方に追い込まれていくのである。

アルナは言った。「平和と自由は切り離すことができない」のだと。

シリーズ 若者たちのアジア太平洋世界

今年度の『CAPS Newsletter』では、成蹊大学所属の若手研究者・大学院生・学部生などが行っているアジア太平洋世界を対象とした研究、あるいはこの地域を舞台にした活動などを、年間を通じて紹介していきます。

第1回目の今回ご紹介するのは、「国際協力サークルM.I.X.」です。この学部生を主体として運営されているサークルはスリランカを主な活動地域に現在、様々な国際協力活動に携わっています。今回は同サークルを支援されている文学部の竹内先生にその設立の経緯を、そしてその設立の時に学部生として携わった大学院生の南斉さん、および現在そのサークルを中心となって運営している学部生の杉山さんに、その活動内容について説明していただきました。若さとヴァイタリティにあふれるその活動の様子を、どうぞご覧ください。

M.I.X. が誕生するまで 竹内ゼミとスリランカ・プロジェクト

文学部教授 竹内 敬子

私とスリランカとの関わりは、1998年卒業の倉典僂さんの一通のメールから始まりました。倉さんは日本語教師としてスリランカに赴任中に2004年12月のスマトラ沖地震を体験されました。そして、ボランティア活動をしながら各地を回り、被害の大きさや、「今」「ここで」必要な支援が現地の人に届かないもどかしさを感じ、ゼミの同窓生に募金を呼びかけるメールを送ったのです。

2005年5月、帰国した倉さんに竹内ゼミの同窓会でこの体験について講演してもらいました。講演の後、「私たちに出来ることはないか？」と話し合い、竹内ゼミ同窓会の「スリランカ・プロジェクト」が生まれました。NGOを訪問してお話を聞くなど、一歩ずつ「自分たちに出来ること」を探し始めました。



〔2007年8月のスタディ・ツアーでM.I.X.のメンバーが訪れた、スリランカの障害者支援施設にて〕

学内では、スリランカを知るために、カレー・ナイトやシンハラ語講座などのイベントを学生たちと一緒に開催しました。カレー・ナイトでは、倉さんの教え子のペレラさんがスリランカ・カレーの作り方を教えて下さいました。シンハラ語講座では倉さんと同じ時期スリランカで日本語教師をしていた岸晴苗さんが講師をしてくれました。

擲祭では川村ゼミとジョイントでスリランカ支援のチャリティ・バザーを行い、その後、この時のメンバーを中心にM.I.X.というサークルが立ち上がりました。学生たちの行動力、エネルギーは素晴らしく、次々と活動の領域、人の輪が広がって行きました。

2006年度には国際文化学科の「国際交流セミナー」という学科の取組みで「スリランカ」をテーマに取り上げていただくことが出来ました。前期には鈴鹿国際大学のクマラ先生の講演会とワークショップを開催しました。クマラ先生を推薦したのも、講演の交渉を担当したのもM.I.X.の学生たちでした。後期には、首都大学東京の高桑史子先生をお招きし『満月の日の死』の上映会を開きました。今年度は6月に国際文化学科の授業である「国際文化研究の現在」の中でM.I.X.の学生たちがスリランカ支援の活動についての紹介をしてくれました。教員と学生が一体となって催しを企画・準備したり、ともに学ぶことはとても楽しく実り多いということを実感しています。

学生たちは独自に活動の領域や人の輪を広げていきました。しかも、それらは地道で誠実で着実なものです。他方竹内ゼミ同窓会の方は社会人主体なも

のですから歩みが遅く、学内外から義捐金のご協力をいただいておりますが、実は、まだ支援先を決めるための調査をしている段階です。この間、倉さんが2度ほどスリランカを訪問しています。ご協力いただいた方へは支援の実現が遅れていること、この

場をお借りして深くお詫びします。学生たちが切り開いてくれた人とのつながりを生かしながら、今年のクリスマスを目途に何かひとつは形にし、みなさまにご報告したいと思っています。

M.I.X. の紹介

文学研究科博士前期課程1年 南斉 真奈美、文学部国際文化学科3年 杉山 亜湖

国際協力サークルM.I.X.は、スリランカ支援を中心に活動する団体です。設立のきっかけは、2005年の櫛祭で行った「スマトラ沖地震被災地スリランカ支援のためのチャリティ・バザー」でした。当時は、まだ大学公認団体ではなく文学部生の有志から成る団体でした。しかし、櫛祭での成功もあって、支援活動を継続したいという熱い思いから学内初の国際協力団体の発足に至ったのです。以来、「身の丈に応じた支援」「持続可能な支援」を合言葉に、スリランカ以外にもミャンマー、カンボジアなどへも支援を行ってきました。

2006年には、国際文化学科主催のスリランカ講演会において、講師の招致などの面で協力しました。同年秋には、大使館主催のスリランカフェスティバルにボランティア参加し、その活動が評価され大使からの感謝状を頂きました。一方、櫛祭では前年度を上回る成果を出し、引き続きスリランカ支援に役立てました。

2007年夏には、念願の現地視察が叶い、メンバーがM.I.X.の支援の実態を自らの目で確認してきました。現地では、私たちの寄付によって購入された図書や文具が大切に使用されており、支援が確実に生かされていることを実感しました。そして帰国後、この経験を多くの人々に伝えるために報告会を開催しました。

またこの視察で、M.I.X.は活動の強力なパートナーとなる団体と出会いました。それがNGOアムルトジャパン（スリランカにおいて緊急支援、女性・障害者自立支援などを行う団体）さんです。以後、M.I.X.はアムルトジャパンさんとの協力体制の下で、同団体によって施された職業訓練の商品の委託販売やマーケティング調査など、活動の幅を広げています。

2007年の活動では、これまでの津波支援の枠を

越え、支援先を障害者施設や職業訓練施設へと拡大しました。よりニーズの高いところへの的確な支援は、現地視察の賜物だと考えています。このような経過を経て、2008年も同国支援に力を入れ、支援金額は過去最高を記録しました。



〔M.I.X.の活動を動かす学生メンバーたち〕

そして今年3月には、再びメンバーがスリランカに渡り、スリランカの現状視察やドネーションを行ってきました。6月下旬その様子を伝える報告会を行い、改めてニーズに合った支援の大切さや、スリランカの素晴らしさを実感しました。さらに、M.I.X.としては二度目となる大学の社会活動支援奨学金の採用も決まり、今後も私達に出来る限りの支援活動を楽しんでいく予定です。

末筆ながら、私たちが活動の拡大と充実化を図ることができているのは、すべて多くの人々のご支援があるからだと考えています。先生方や学生の皆さんをはじめ、地域の方々、アムルトジャパンさんほか、支援先の人々など、活動を支えてくださっている皆様に常日頃感謝をしております。

CAPS 主催 公開シンポジウム 報告

講演：Integrated Development and Energy Management of Rural Arid Village through Afforestation and Remote Sensing

Prof. Sanjay Kumar (Director, Center for Renewable Energy and Environmental Research, and Professor, Chandragupt Institute of Management, Patna, India)

The yearning of development is so fundamental that it cannot be curbed, nor can it be held in harness to await a more conducive climate. In India, we are confronted with the demands of very basic needs of rural population growing not just in size but also in awareness. Unfortunately, persistent flight of capital and able labour force from rural areas has not only been detrimental to rural development but also caused demographic imbalances leading to sufferings and violence in many areas.

The most important issue in rural development is “energy and environment”. House holds sector constitutes nearly 75% of the total energy consumption, out of which 90% is for cooking. Animal wastes, wood products and agricultural residues are the only source of energy to meet these demands. Though commercial fossil fuel based energy supply has increased in recent years, statistics show that they are mostly limited to areas where other biomass energy cannot be used such as irrigation and tillage. Conventional methods of gathering fuel wood and dung takes time - which could have been devoted to more productive activities such as farming. These sources of energy are responsible for environmental degradation, health hazards and reduction in availability of natural fertilizer for growing crops. Smoke from fuel woods contain dangerous (several times carcinogenic) and excessive levels of shoot. Chronic respiratory diseases among children and women are attributed to them. Besides, deforestation has caused reduced availability of fuel wood and more time to collect it. Soil erosion, surface run off and stress on ground water availability has further stressed rural life prompting mass migration to the slums of mega cities for survival.

The best way to reduce this stress and stop mass migration of able labour forces from rural areas is to match the limited resources with many problems in a sustain-

able manner taking into account their socio-economic and cultural values. On the basis of surveys of people’s perception, ability and availability of resources, a method-



〔講演中の Sanjay Kumar 教授〕

ology was developed for introduction of appropriate technology in the field of renewable energy sources along with plantation strategy. Plant species were selected by optimizing the requirement of the entire village for timber, fuel wood, health (horticulture species), value added plants (medicinal plants), fodder requirement, and natural pesticide (neem). The efforts were supplemented by introduction of solar lights, biogas for cooking, solar drying technique for employment generation as well as food protection, and environmental awareness. Earthen pot system was introduced for typical plantation of *Emblica officinalis* in stress water availability condition for increased water and fertilizer us efficiency.

Results indicate a reduction of 50% in mass migration of rural population, which shows better condition in the village now. Now, Hyper-spectral data from LISS - III satellite in mid-infrared range is obtained and analysed for determining high salinity areas and plate faults for effective large scale plantation and salinity control and drainage.

Sanjay Kumar 教授講演：Integrated Development and Energy Management of Rural Arid Village through Afforestation and Remote Sensing のご紹介

理工学部教授 小島 紀徳、理工学部特別共同研究員 黒澤 勝彦

今回は2009年5月16日に開催された公開シンポジウム“Integrated Development and Energy Management of Rural Arid Village through Afforestation and Remote Sensing”の内容についてご紹介させていただきます。今回、講師にお招きしたのはインドから招聘したSanjay Kumar教授です。Chandragupt Institute of ManagementのCentre for Renewable Energy and Environmental Researchに教授として在籍されるとともに、自らCREER（Center of Renewable Energy and Environment Research）を組織し、植林を利用したインド農村の発展と安定を目指す実践的研究を推進しておられます。

Kumar教授が研究を行っているBihar州はインド北東部のヒマラヤ山脈の麓に位置し、雨期には豪雨があるのですが、乾期にはほぼ降雨がありません。農村では人口増加に伴う樹木の伐採・開発と雨期の豪雨により、薄い表層土が流出して岩石（雪解け水の洪水でヒマラヤから運ばれてきた）が地表に露出している土地がたくさんあります。耕作可能な土地は減少しており、自然には森林も農地も回復しないので農村の生活環境は悪化しつつあります。農村の人々は生き残るためやがて故郷を棄て、大都市のスラム街へ流入して社会問題となっています。

Kumar教授はこの問題を解決するために、農村の経済活動や意識に関する調査を行い、その生活のためのエネルギーを、限りある化石燃料資源や森林からの薪の搾取によるものではなく、再生可能エネルギーでまかない、農村の生活を最適化しようと考えました。Kumar教授はまず植林とポット灌水などを用いた植林技術改良を行い、薪、材木、薬用植物、天然殺虫剤などに利用できるようにしました。もちろんこの作業は時間と労力を伴いますが、畜産廃棄物や森林からの余剰生産物を集めてバイオガスを生産し、これを調理用のエネルギーと使うことで薪集めの苦労や、また薪を用いることによる従来子供や女

性に多くみられた呼吸器疾患を軽減するとの効果を生みます。また、食品保存と雇用創出のために太陽光を効率よく用いる天日干し技術を導入しました。同時に教育活動により環境意識を高めることで、当該地域の労働人口の流出は50%減少しました。

さらにKumar教授は衛星観測により塩分で劣化した土地と断層の解析をし、広く観察することで各地の問題点を一目で分かるようにするための技術開発も進めているということで、今後、対策技術が迅速かつ大規模に導入されることが期待されます。

ご講演内容は上記の通りですが、本学理工学部、あるいは大学院工学研究科などから数十名が参加し、活発な議論が行われたことを申し添えます。教授は元Bihar大学におられ、成蹊大学工学部の客員研究員も約1年間経験された方ですが、今年の4月



〔公開シンポジウムの様子〕

から教授として上記の大学に移籍されたとのことでした。州により設立された最も新しい大学院大学であり、名称からもわかるように理工系というより経営分野の大学で、その中で技術をどう適切に用いてゆかかというセンターにおられます。今後、学際的な学術交流、特に研究者や大学院生の相互派遣などを具体化されたいというご意向も伺っており、是非この面でのご協力をも頂ければ幸いです。最後になりましたが、このような機会を設けていただきましたセンターに感謝申し上げます。

報告：2008年度学術研究員によるメンター研究会

アジア太平洋研究センター(CAPS)は2007年度に、本学所属の大学院生を対象とした研究支援制度「学術研究員制度」を創設いたしました。本制度の目的は将来専門的な研究活動に携わってほしいとする若手研究者の育成にあり、選ばれた学術研究員たちにはその研究活動に必要とされる様々な便宜がセンターによって提供されています。(なお今年度の学術研究員の募集は、6月で終了しました。)

そうした便宜の中でも目玉の1つになっているのが「短期メンター制度」です。この制度により学術研究員は、自己の研究に関わる専門家を「メンター」として学外から短期に招聘することができます。センターでは、その際に必要とされる経費や手続きに対し支援や補佐を行っています。

昨年度3月には2名の学術研究員がこの短期メンター制度を利用し、それぞれ独自にメンター研究会を開催いたしました。以下は、その学術研究員自身の手による同研究会の報告です。

メンター研究会報告

「私にとってのNPO、市民社会の今後 NIRA(総合研究開発機構)報告書から15年」

講演者：木原 勝彬氏(ローカル・ガバナンス研究所所長)

報告者：松元 一明(2008年度学術研究員、現法政大学大学院多摩共生社会研究所特任研究員)

2009年3月17日(火)にメンター制度のもと、ローカル・ガバナンス研究所の木原勝彬所長をお招きし、講演会を開催しました。木原氏は、まちづくり系市民活動家の草分け的存在であり、また「特定非営利活動促進法(NPO法)」成立の基礎となった「総合研究開発機構(NIRA)報告書(No.930034)」の研究代表者でもあります。講演会では、報告書刊行に至るまでの経緯のほか、今後の「市民セクター」の課題や、市民自治の構想についてお話いただきました。

まちづくり研究からNIRA報告書刊行まで

木原氏は1970年代後半より、地元である奈良町への取り組みを開始しました。「地域主義」の思想



〔木原氏による講演会の様子〕

のもと主催された研究会は、78年に「奈良を考える会」、79年には「奈良地域社会研究会」と発展し、84年5月の「社団法人奈良まちづくりセンター」設立に至りました。

同センターの活動は、歴史的町並み保全など市民による「まちづくり」のさきがけとなったいっぽう、住民の無関心や活動資金不足などさまざまな困難に直面しました。木原氏によれば、こうした「壁」にぶつかったことが、NIRAの調査にかかわる契機になったとのことでした。

その後1991年から93年にかけて木原氏は、ペナンヘリテイジトラスト(マレーシア)や英国シビクトラストを視察し、市民活動の財政基盤に関する情報収集にあたりました。この経験を生かし、NIRA報告書に日本の市民活動の実態調査や、基盤整備に関する提言をまとめられました。

この頃国内では、同時多発的に市民活動の制度整備を目指す市民グループができました。背景には、公益に関する行政の限界や、公益活動に取り組む市民団体の脆弱な基盤を何とかしようとする木原氏のような人びとの存在があったのです。木原氏によれば、市民グループの間には「公益法人制度に対する問題意識」が共有されており、結果的にそれぞれの活動が、「(政府セクター、営利セクターに対比した)市民セクターの可視化」を促したということでした。

「公益法人制度に対する問題意識」と「市民セクターの可視化」

これまで公益に関する施策や事業は、国や自治体などの行政機関やそれらが管轄する公益法人が独占的に実施してきました。全国一律、同質の公共サービスを供給したいっぽう、主務官庁制の弊害や、官による公益が必ずしも市民公益に与しないということが露呈しました。

その問題解決に取り組んだのが当時の市民グループでした。結果、主務官庁制を排したNPO法制度(1998年成立)や、第三者委員会による公益認定を準則する新公益法人制度(2008年開始)が実現されました。市民が「公益(市民公益)」の担い手になることを容易にし、民間非営利活動を促進したのです。

これまでも市民団体は、行政だけではカバーできなかった社会問題や地域課題への対応をはじめ、「官による公益」に対する異議申し立てや、代案の提示などをおこなってきました。市民団体(住民運動、市民運動から福祉・環境などに取り組む市民活動まで)が活動分野や地域を超え、目的の共通性と

連帯の必要性に気付いたこと(市民セクターの可視化)も、市民活動の制度化へとつながりました。

本講演の意義

本講演は、長年にわたる市民活動家であり、実際にNPO法成立のきっかけをつくった当事者の一人である木原所長のお話を聴ける貴重な機会でありました。さらに参加者の多くが、NPO法成立に尽力した関係者であり、質疑応答や論議からも当時のダイナミズムを感じることができました。

これまでNPO法成立以前の市民活動の体系的研究は少なく、また分野が広範なため、市民活動の解釈は論者によりさまざまでした。しかし今回は、NPO法成立までの市民活動の実態や制度化に至る背景を知ることができ、「市民セクター」の原点を再確認しました。また「市民セクター」をめぐる課題や、今後の目指すべき方向を考察する上で、非常に参考となるお話を伺うことができました。木原所長をはじめ、参加者、関係者の皆様にはあらためて感謝申し上げます。

メンター研究会報告

「Tennessee Williams における Sexuality の表象」

講師：舌津 智之氏(立教大学教授)

報告者：真野 貴世子(2008年度学術研究員、成蹊大学文学研究科博士前期課程2年)

2009年3月12日、情報図書館のプラネットにて、立教大学文学部の舌津智之先生をお招きして「Tennessee Williams における Sexuality の表象を考える」というテーマでメンター研究会を開催いたしました。研究会は参加者が少なかったこともあり、講演形式ではなく参加者によるカジュアルなディスカッションという形で行われました。

Tennessee Williams は1950年代を中心に活躍した20世紀アメリカ演劇を代表する劇作家であり、彼の代表作は今もなお再演され続けています。今回の研究会では、Williams 作品の批評の多くが彼自身のホモセクシュアリティと関連させられていることを踏まえて、彼の作品の中でも特に極端な暴力と結びついた形でホモセクシュアリティが表象されているとされる *Suddenly Last Summer* (1958) を議論の対象としました。従来この作品は、(既に死亡している)主人公、Sebastian が自身のホモセクシュアルの罰として、自らをカニバリズムの暴力の生贄とすることで壮絶な死を遂げる、という悲劇的枠組みの中



〔舌津教授(中央)と研究会の様子〕

で、Sebastian を犠牲者として解釈する場合がありますが、研究会の目的はそういった先行する解釈を踏まえつつもそこから一步離れ、別の解釈可能性を探っていこうとする試みでもありました。まず舌津先生から、近年のWilliams 研究の動向として、これまで初期の作品として位置付けられていた *The Glass Menagerie* (1945) 以前の1930年代に書かれ

た一連の作品が注目され始めていることをお話ししていただきました。 *Suddenly Last Summer*は1950年代に書かれた作品ですが、舞台は1930年代ということもあり、「30年代」と関連させることで新たな視点が見いだせるのではないかとのことでした。

次にテキストに関して以下のような議論が行われました。

- ・ テキストに散在しているカニバリズム（人肉嗜食）のイメージは、ホモセクシュアリティの贖罪としての死を想起させ観客に一種のカタルシスを与える効果を持っているという視点ではなく、テキスト空間全体を彩るオルタナティブな規範を提示しているのではないか。
- ・ Sebastian と彼の従弟 George をつなぐ“inherit”という語に焦点を当てることで、Sebastianの死が一義的にvictimizationと結びついているのだとする見方を逆転させ、実は肯定的にホモセクシュアリティの表象がなされている可能性を見いだせるのではないか。
- ・ Sebastian の衣服を「遺産」として譲り受けた George は外見だけでなくホモセクシュアリティという性質をも密かに譲り受けていたのではないかと考えることは、Sebastianの死が必ずしも「結末」ではないと論証づける手立てになるかもしれない。

- ・ テキストで言及される「空白のページ」および「白い紙」という概念は、無から何かを産み落とすという創作過程における Williams の恐怖心を投影しているのではないか。彼の代表作である *A Streetcar Named Desire* (1947) にも同様な白い紙のイメージが描かれている。

時間の都合もありどの議論も結論に至ることにはなりませんでした。解釈可能性を探るという目的は達成できたのではないかと考えています。以上のことを今後の課題として追究していきたいと思えます。

最後に研究会を通しての感想を述べさせていただきます。私は当初このテキストをポスト・モダニズムへの展望を込めて読むことはできないか、と密かに考えていました。そのため「モダニズム」と「ポスト・モダニズム」をつなぐ「後期(レイト)モダニズム」なる概念について舌津先生に詳説していただいたことは、思潮概念と作品との関連性を考えるとき、後天的に付与された時代区分に頼りがちであった私の思考に鮮烈な印象を与え、大変有意義な機会となりました。また新たな論点を議論しあう中で、批評行為に潜む魅惑と苦悩を再確認するという貴重な体験ともなりました。このような機会を与えてくださった舌津先生に、心よりここにお礼申し上げます。

アジア太平洋研究センター(CAPS)

研究プロジェクト募集!

CAPS では、来年度のプロジェクトを募集いたします。詳細は内線 3549 まで。

応募書類受付：9月3日(木)～9月16日(水)



共同研究プロジェクト (研究費は上限 600 万円)

- 期 間 : 3 年間
 メンバー : 本学専任教員を少なくとも 2 名含むこと
 責 務 : 終了後 1 年以内に叢書を出版、など

パイロットプロジェクト (研究費は 50 万円)

- 期 間 : 1 年間
 メンバー : 本学の専任教員による個人研究 (1 名)
 責 務 : 本センタージャーナルへ論文提出、など

プロジェクト説明会

プロジェクト説明会を下記の日程で行います。是非ご参加ください。

7月17日(金) 12:15～13:00

7月21日(火) 12:15～13:00

場所：両日とも 10 号館第 2 中会議室

シリーズ 本を読む

伊藤達雄・戒能通厚編『アジアの経済発展と環境問題
1日発行 明石書店』

社会科学からの展望』(2009年4月
法学部准教授 佐藤 義明

本書はアジア社会科学研究協議会連盟(AASSREC)第17回隔年総会(2007年)に提出された報告をまとめたものである。法学や経済学はもちろん、工学的なアプローチの紹介もあり、いわゆる社会科学・人文科学・自然科学という分類を超えて、環境問題を焦点に、科学者のコミュニティが「俯瞰的視点」に立って「社会のための科学」を構築しようとする試みの一環といえることができる。

本書は、序章および終章、ならびに、それらに挟まれた3部で構成される。

第1部は「社会制度としての環境」と題され、5章で構成される。社会的共通資本または「コモンズ」という概念に注目する報告とそれに対するコメント、および、日本の経験をアジアの環境問題の解決に生かすための方法に関する報告とそれに対するコメントを所収する。ここでは、経済学者と法学者とが、課題を発見し合うための建設的な対話を試みている。

第2部は「グローバル化時代の環境問題と社会科学」という共通テーマの下で、「まえがき」と4ないし5の報告を含む3章で構成される。第1章では、ラオスからタイへの人口移動、韓国の干拓事業、日本の都道府県「地球温暖化防止活動推進センター」の設置、そして、汚染物質排出移動登録(PRTR)制度などが取り上げられている。第2章では、環境負荷を低減させる物流のパラダイム、熱交技術と空気浄化技術、オフィスの省エネ化、製品の廃棄と次の生産を結合することによって循環型のシステムを構築する閉ループ・サプライチェーン・マネジメント、さらに、国産材の利用を促進する産直型の住宅建設システムが取り上げられている。第3章では、津波災害の軽重に関する土地の条件および復興過程における課題、ならびに、港湾災害への対策と防災が取り上げられる。

第3部は、国(地域)ごとの特徴を反映する17か国(地域)の報告の要旨を掲載する。例えば、日本



の国別報告は、「長年の間、国民が待ち望んでいた憲法改正を実現し、環境に関する国民...の義務...を明記...することが大切である」とする。この報告を提出した日本学術会議は、本書の終章に掲載された同会議元会長の講演によれば、「科学者のコンセンサス」に基づく「ニュートラル・アドバイス」を政治的な決定を下す国の機関におこなうべき「科学者の自律的な集団」と位置付けられている。国民が憲法改正を熱望してきたかどうか、また、国民の義務を憲法に明記すべきことに(社会)科学者のコンセンサスがあるかどうか。かりにこれらが自明視できないとすれば、この報告そのものが科学者のコミュニティの名でおこなわれる活動に関する社会科学的な研究の好対象となるだろう。

本書は、アジアの科学者たちが、グローバルなネットワークの一部を構成しながら、同時に、アジア地域の問題を掘り起こし、地域的な個性に応じた解決を模索するという「グローバルな」活動を知るための良書である。本書の読者は、そのような科学者の試みが、俯瞰的な視点に立って「社会のための科学」の構築という目標に至るまでの数々の課題に思いを巡らせる良い機会を得るだろう。

アジア太平洋研究センター 招聘外国人研究員 募集!

2009年12月7日(月) 締め切り

CAPSでは、来年度の招聘外国人研究員を募集いたします。詳細は内線3549まで。

便宜供与

滞在期間：Aコースは1～2ヶ月程度、Bコースは1～3ヶ月程度

宿 舎：国際交流開館を無料提供(A、Bコース共通)

交通費：Aコースのみエコノミー割引航空運賃支給

謝 礼：右(「責務」の項)の～ に対し謝礼支払い

責務

研究会発表(A、Bコース共通)

ニューズレター原稿執筆

(A、Bコース共通)

センター紀要に寄稿(Aコース)

2009年度CAPS新メンバー紹介

アジア太平洋研究センター(CAPS)には今年度、昨年度より所属している亀嶋庸一所长(法学部教授)・重野純子特別研究員・山上亜紀特別研究員・相澤真一特別研究員・小宮山真美子客員研究員の5名に加えて、新たに7人のメンバーが加わりました。

2009年度のフレッシュな顔ぶれを、ここに紹介したいと思います。

【所員 経済学部・中神康博先生】

これまでアジア太平洋センターにはたいへんお世話になってきた。もう10年以上も前のことになるだろうか。『小原プロジェクト』で韓国の地方分権の問題にかかわり、それが2003年度から3か年にわたる『日韓教育プロジェクト』のきっかけとなった。このふたつのプロジェクトを通して韓国の研究者と交流を深めることができたのはまことに喜ばしいことであった。アジア太平洋研究センター所員は今回で2回目となる。アジア太平洋研究センターから素晴らしい研究成果が生まれるよう、少しでもお役に立てればと思う。どうぞよろしくお願いたします。

【所員 文学部・松浦義弘先生】

当センターの所員をやっておられた石剛先生が学科主任(文学部国際文化学科)に就任されることになったため、石先生の残存任期1年をピンチヒッターとして引きうけることになりました。私自身はこれまでアジア太平洋地域とは無縁なフランス革命史研究に従事しており、当センターの所員となることにはおおいにためらいがありました。けれども前述のような事情もあり、またセンターの共同研究プロジェクト「デモクラシーとナショナリズム アジアと欧米」に参加させていただきセンターと関わりをもったこともあって、所員を引きうけさせてもらった次第です。よろしくお願いたします。

【所員 理工学部・山崎章弘先生】

理工学部物質生命理工学科・山崎です。本年2009年4月よりアジア太平洋研究センターの研究員を務めることになりました。よろしくお願いたします。本来の専門は化学工学で、化学工学を用いて環境問題の解決に必要な技術を開発することを研究の主眼にしています。温暖化や酸性雨のような地球環境問題の解決のためには、欧米の先進国だけではなく、中国やインド等アジア各国を含む協力体制が不可欠です。アジア太平洋研究センターの研究員として、アジア地域に適した環境技術の開発の方向を探れないかと考えています。

【所員 法学部・佐藤義明先生】

法学部で国際法・などを担当しております佐藤義明です。地域主義の国際機構の考察を研究テーマの1つとして参りました。これまで、東アジア共同体の形成について、中村民雄元本学教授(現東京大学教授)他と共著で『東アジア共同体憲章案』(昭和堂)を上梓したり、東アジアにおける人の移動について「外国人研修・技能実習制度の『職業能力開発権』促進型再構成」(Works Review4号所収)を公刊したりしています。本センターの所員として活動する機会を活かして、アジア・太平洋地域を視野に入れた研究を進めたいと存じます。どうぞよろしくお願致します。

【主任研究員 愛甲雄一さん】

今年度よりセンターの主任研究員として就任しました、愛甲雄一と申します。私の当センターでの本業は、そのタイトルが示す通り、まさに自分自身の「研究」を進めていくことです。しかしそれと合わせてセンターが主催する様々な企画の立案・実行、CAPSニューズレターや雑誌『アジア太平洋研究』の編集などについても担当していくことになっています。どうかよろしくお願い致します。ちなみに私は、これまで18世紀前後のヨーロッパにおける国際政治思想を主たる研究対象として参りました。しかし今回の就任を機に、アジア太平洋世界における国際政治思想の歴史にも研究対象のウィングを広げられれば、と考えております。

【特別研究員 楊燕さん】

Hello, everyone, my name is Yan Yang. I came from Shandong Province, China. After I got my Ph.D degree in Japan, I joined Seikei University in April 2009. My research goal is to design distributed algorithms in different network environments, like in distributed servers and wireless sensor networks. My interest is travel, reading, Yoga and many kinds of sports; especially I like nice feeling when traveling abroad. My role as a researcher is to find problems in network communication and then solve such problems. I hope I could publish more papers and attend more international conferences, and as a result I could travel in different countries as well as share my new idea with other people. I really enjoy my work and my life here.

【客員研究員 高一さん】

6月から客員研究員となりました高一（コ・イル）と申します。主たる研究テーマは「朝鮮半島と東アジア国際政治」でありまして、現在は1970年代に関心を持っています。私自身は、この時期に今日の朝鮮半島をめぐる国際環境の枠組みが固定化されつつあったと考えております。今回多くの方々の協力により、成蹊大学アジア太平洋研究センターと関係を持つことができたのですが、研究環境の充実具合に大変驚いております。このような素晴らしい環境での研究成果を、センターならびに大学に還元できるよう努めたく思います。



上：左より小宮山客員研究員、高客員研究員、山上特別研究員

下：後列左より愛甲主任研究員、理工・山崎先生、文・松浦先生
亀嶋所長、経・中神先生、法・佐藤先生
前列左より重野特別研究員、楊特別研究員、相澤特別研究員



センター活動報告

(2009.3.16 ~ 6.15)

3月21日(土)ロマン主義研究プロジェクト海外出張
(3月28日帰国)

出張者: 成蹊大学法学部教授・里村 和秋

調査地: ドイツ・ミュンヘン大学、オーストリア・
ウィーン大学およびオーストリア国立図書館

目的: 現地での研究動向調査、研究資料収集

3月22日(日) 国際シンポジウム「デモクラシーと
ナショナリズム アジアと欧米」開催(成蹊
大学アジア太平洋研究センター・法学部共
催) 8号館101教室 13:00-17:30

司会: 西崎 文子(成蹊大学)

報告者: 加藤 節(成蹊大学)・John Dunn(ケンブリッ
ジ大学)・Michael Adas(ラトガース大学)・唐
士其(北京大学)・平石 直昭(東京大学)

コメンテーター: 松浦 義弘(成蹊大学)・李 静和(成
蹊大学)・孫 歌(中国社会科学院)・酒井 啓
子(東京外語大学)・小島 潔(岩波書店)・Jane
Adas(ラトガース大学)・Ruth Scurr(ケン
ブリッジ大学)

総括: 亀嶋 庸一(成蹊大学)

出席者: 約80名

4月21日(火)アジア太平洋研究センター主催・オリ
エンテーション、13:00-13:30

テーマ: 新任教員他全教員を対象とした、センターが
行っている活動・研究サポート制度の説明会

場所: 10号館2階第2中会議室

5月16日(土)アジア太平洋研究センター主催・公開
シンポジウム開催、13:10-14:30

テーマ: “Integrated Development and Energy Management
of Rural Arid Village through Afforestation and
Remote Sensing”

講演者: Sanjay Kumar 博士(Director, Centre for Renew-
able Energy and Environmental Research, and
Professor, Chandragupt Institute of Management,
Patna, India)

場所: 14号館4階401大会議室

出席者: 約50名

5月25日(月)P2P オーバレイ・ネットワーク研究プ
ロジェクト海外出張(5月30日まで)

出張者: 成蹊大学アジア太平洋研究センター特別研究
員・楊 燕

出張地: イギリス・ブラッドフォード大学

目的: 国際会議 The IEEE 23rd International Conference
on Advanced Information Networking and Appli-
cations (AINA-09) に出席し、研究発表を行
うため

6月13日(土)社会的不平等の調査研究プロジェクト
研究会開催、12:00-18:00

テーマ1: 他者へのアクセス可能性と地位達成: ポジ
ション・ジェネレータを用いて

報告者1: 信州大学人文学部准教授・辻 竜平

テーマ2: Evolutionary Game Theoretical Analysis of the
Interaction between Attitude and Behavior
through Cultural Transmission

報告者2: 東京工業大学大学院・関口 卓也

場所: アジア太平洋研究センター会議室

出席者: 10名

6月13日(土)アメリカと暴力プロジェクト研究会開
催、15:00-19:00

テーマ1: Uncle Tom から Dred へ 19世紀中葉におけ
る反乱奴隷の表象をめぐる

報告者1: 成蹊大学兼任講師・堀 智弘

テーマ2: 暴力と赦しの関係を見直すために “こと
ば” で出来ること/出来ないこと

報告者2: 成蹊大学教授・下河辺 美知子

場所: 10号館2階中会議室

出席者: 7名

6月14日(日)日中経済刑法の比較研究プロジェクト
研究会開催、10:00-18:00

テーマ1: 経済犯罪の規制手段と手続き

報告者1: 川出 敏裕(東京大学)・張 明楷(清華大学)

テーマ2: 相場操縦罪

報告者2: 佐伯 仁志(東京大学)・陳 興良(北京大学)

テーマ3: 不法収益の剥奪

報告者3: 金光旭(成蹊大学)・謝 望原(人民大学)

テーマ4: 環境犯罪

報告者4: 東 雪見(成蹊大学)・梁 根林(北京大学)

場所: 東京大学

出席者: 15人

センター招聘外国人研究員

3月19日(木)ラトガース大学(アメリカ合衆国)よ
り、Michael Adas 教授と Jane Adas 教
授が「デモクラシーとナショナリズム
」に関する研究のため来日(3月25
日まで滞在)

4月28日(火) Sanjay Kumar 博士(Director, Centre for
Renewable Energy and Environmental Re-
search, and Professor, Chandragupt Insti-
tute of Management, Patna, India)が“In-
creasing Fertilizer and Water Use Effi-
ciency in Desert Afforestation by Earthen
Pot System”に関する研究のため来日
(6月3日まで滞在)

6月13日(土)陳 興良教授(北京大学法学院)・梁 根
林 教授(北京大学法学院)・張 明楷
教授(清華大学法学院)・謝 望原 教授
(人民大学法学院)が「日中経済刑法の
比較研究」のため来日(6月18日まで
滞在)

CAPS Newsletter No.103

2009年7月15日発行

編集発行: 成蹊大学アジア太平洋研究センター

〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jpWeb: <http://www.seikei.ac.jp/university/caps/>